

貝 塚 と は 何 か

——加曽利貝塚と大型貝塚の意義——

後 藤 和 民

1. 貝塚を観る眼

一般に、縄文時代の貝塚に対する近代考古学的な認識は、明治10年(1877)、アメリカの動物学者、エドワード・S・モースの東京都大森貝塚の発掘調査によってはじまったといわれています。もちろんそれ以前から、貝塚そのものの存在については、すでに日本人の間で知られていました。ただ、その貝塚がいつの時代のどんな意味をもったものかという、その時代的背景や存在意義の捉え方こそ問題なのであります。それは、現代の日本考古学界においても同じことがいえるのです。

たとえば、縄文時代を捉えるうえで、従来きわめて対照的な2つの観点がありました。まずそれを確かめるため、古く民間に残された伝承のなかから例を取りあげて、比較・検討をしてみなければなりません。

(1) 巨人伝説

和銅6年(713)、元明天皇の勅命によって、全国からその国の地勢・産物・伝承などを書きあげて献上した『風土記』という地誌があります。わずかに残った『常陸国風土記』のなかで、那賀郡(現茨城県那賀郡)の条に、次のような記事が載っています。

平津の^{うまや}駅家の西^{きと}12里に岡有り。名を大櫛といふ。上古、人あり。跡は極めて長大く、身は^か丘壘の上に^る居ながら、手は^{うづべた}海浜の^{おほうむす}蟹を^{くじ}摺りぬ。其の食ひし貝、積聚りて岡と成りき。時の人、大櫛の義を取りて、今は大櫛の岡と謂ふ。其の踐みし跡は、長さ^{あし}卅余歩、広さ^{あし}卅余歩なり。尿の穴の徑、^{すまり}卅余歩許なり(註1)。

この遺跡が、茨城県茨城郡常澄村（旧那賀郡大串村）に現存しており、縄文後期の大型貝塚として国の史跡に指定されている大串貝塚であることはいうまでもありません。すなわちこの伝承が、平安時代の日本人が縄文時代の貝塚に対して下した一種の解釈であることも明らかであります。とくに、「尿の穴趾」や「踐跡」というのは、当時まだ埋めきらずに凹んでいた堅穴住居址であつたろうことも想像に難くありません。

こうした認識は、平安時代の関東地方のみにかぎらず、かなり普遍的であつたとみえて、実は、その後江戸時代の東北地方にまで及んでいるのです。たとえば、享保4年（1719）に佐久間義和が編んだ『奥羽観蹟聞老志』（註2）という一種の地誌のなかで、宇多郡鹿狼山の条に次のような記事が載っています。

「新地の村中に農家ありて、貝殻屋敷という。その昔神仙あり。平日、イグカロ山に居り、貝子を好んで食す。その臂肘は甚だ長く、しばしば長臂を山巔より伸ばし、東溟中より数千の貝子を採る。その貝を噛んで、この地に殻を棄て、積むに委せて丘の如し、郷人その神を称して手長明神と謂ふ。捨てし殻の地、これを貝塚と謂う（以下略）。

そして現に、その該当地である福島県相馬郡新地町小川には、縄文後・晩期の大型貝塚として国の史跡に指定されている新地貝塚が現存しており、またすぐ近くに、元禄年間（1688～1704）に里人がその巨神を祀ったといわれる手長明神のほこら祠があり、これも国の史跡に指定されております。

このように、大串貝塚も新地貝塚も縄文時代の大型貝塚であります。そのあまりにぼう大な量の貝殻が広範囲に累々と堆積している状態をみて、当時の人びとの日常的な貝の食べ方や棄て方とあまりに異なっていることに驚嘆し、その不可解な現象の成因について、彼らは彼らなりの歴史的解釈を下したのであります。これは、「手長足長」、「大太郎坊」、「天邪鬼」などと呼ばれ、当時の知識では解明できない不可思議な地形や天然現象などの生成について、それを超人の仕業とする「巨人伝説」の一種であります。この巨人伝説に対して、もっとも対照的なものが、当然「矮人伝説」ということになります。

(2) 矮人伝説

たとえば、北海道のアイヌ人の間で古くから伝えられている「コロボックル伝説」というのがあります。「コロボックル」とはもちろんアイヌ語で、本来はコロ（フキの葉）・ボク（の下に）・コル（持つ）・ウン（住居）・グル（人）といい、合わせて「フキの葉の下に住む人」（矮人）という意味だそうです。

このコロボックルは、日ごろアイヌの狩りや漁の獲物をこっそり横取りしたり、夜ごと戸口を叩いて食物を乞いに来るが、その姿を見た者は一人もいなかった。ある夜、いつものように戸を叩く者があるので、今度こそ正体を見届けてやろうと、食物を与える振りをしながら、その手を掴んで家のなかに引張りこんでみた。それは目を覆うほど美しい裸身の少女でありました。そのまま3日間、食物も与えずに閉じ込めてから放してやると、コロボックルたちは、一族が辱めを受けたとばかり、自分たちの家や土器などをことごとく叩き壊して、千島などの離島へ立ち去ってしまいました。アイヌはもともと土器を作らないので、その住居址に捨てられた土器を拾って、家宝のように大事にする者もあり、また、コロボックルの美少女が口許に入墨をしていたのが忘れられず、それからアイヌの間では、女の口許に入墨をする習慣がはじまった云々というのであります（註3）。

かつて日本人類学会では、明治19年（1886）の草創期において、すでにその創始者である坪井正五郎らが縄文人種論をめぐって、このコロボックルこそアイヌによって北海道から駆逐された実在の民族であり、それこそ縄文人であったと主張し、縄文人アイヌ説と激しく対立しておりました。ところが、明治32年（1899）、坪井教授の命を受けた愛弟子の鳥居龍蔵が、コロボックルが逃げこんだという北千島やカムチャッカなどを探検したところ、住民は北千島アイヌで、コロボックルの存在はおろか、その口碑さえ残されてはいないことが確認されました。

すなわちコロボックルとは、あくまでもアイヌ人が想像した架空の人種であって、おそらく、埋まり切れないまま凹んでいる縄文時代の竪穴住居址をみて、そこに住んでいた縄文人に対して、アイヌが下した歴史的解釈に違いありません。日常の自分たちの住居に比べて異常に小さく、そのなかから見馴れない小型土器

が出土し、周囲にはフキの葉が覆い繁っていることから、そのような矮小な人間像を描いたに違いありません。

同じ縄文時代の人間に対して、この2つの伝説が存在することは、はたしていかなることを意味しているのでしょうか。

(3) 『ガリヴァー旅行記』

そこで、この巨人伝説と矮人伝説とを対比しながら思い出されるのは、18世紀のイギリスを代表する諷刺作家スウィフトの最高傑作『ガリヴァー旅行記』(註4)であります。これは、ガリヴァーという船医がさまざまな奇異なる国々に漂着したという想定で、元来4部構成になっていますが、従来一般に愛読されているのは、第1部のリリパットという小人国と、第2部のブロブディングナグという巨人国の物語であります。それらは、一見荒唐無稽な「お伽話」のようにみえますが、実は当時のイギリスにおける宮廷生活の不合理や頹廃ぶりを痛烈に諷刺したものであります。

ところが、同じイギリスの世相を対象としながら、それを傍観し批判するガリヴァー自身の視点によって、それが滑稽な小人にもなり、同時に巍然たる巨人にもなるということ、すなわち、対象そのものがにわかに矮小化したり巨大化するのではなく、実はそれを観る者の観点の広狭にこそ原因があることを、見事に比喩しているのであります。

これは、先に挙げた矮人伝説と巨人伝説にも適合し、同じ縄文時代の竪穴住居址を対象としながら、それを片や巨人の足跡や尿穴と解し、片やコロボックルという矮人を想像する。これはまさに、考古学的現象に対して解釈を下す、考古学者の観点のあり方を象徴的に物語っているのであります。たとえば、機械文明や近代科学が発達した今日を、文化の進歩の最高潮であると過信している者にとっては、縄文時代などは野蛮で未開な社会だったと映るでしょう。しかし、人間も自然のなかの一生物、一動物、一景物にすぎないことを自覚している者にとっては、その大自然に雄々しく挑み、自然を生かしながら自然のなかで人間らしい人間の文化を築いてきた縄文人は、現代人に比べて決して劣らない人々だったと映

るかも知れません。これは、矮人か巨人かの論議よりもはるかに重要な問題です。

「貝塚とは何か」という課題に対して、われわれが何らかの解釈を下すにしても、その根底において、自分自身がいかなる観点をもって臨むかという自覚なくしてはできるものではありません。ですから、いまここで私が述べる縄文貝塚の解釈についても、その責任は、あくまでも私の観点到こそこあることは、いうまでもありません。

2. 縄文時代の遺跡

(1) 従来イメージ

縄文時代とは、いまから約12,000年前から約2,300年前まで約10,000年間も続き、とくに縄文土器と磨製石器（新石器）を用いていた「新石器時代」で、それ以前のまだ土器の製作技術も知らず、打製石器（旧石器）を用いていた「先土器時代」（旧石器時代）から飛躍的に発達した、世界でも独特な文化なのであります。

ところが従来、1877年のL・H・モルガンの『古代社会』（註5）における「発明・発見による発展段階説」や、その影響を受けたマルクス＝エンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』（註6）におけるヨーロッパ中心主義の「一線的発展段階説」や、さらにその影響を受けたG・チャイルドの『文化進化論』（註7）などに感化された日本の考古学界には、それらに基づく固定的な観点があります。とくに、これらの学者たちは、1859年刊行のダーウィンの『種の起源』（動物進化論）（註8）の影響を受け、それをそのまま人間の文化にあてはめて「文化進化論」を構成し、しかも進化＝進歩という単純な論理的置換によって、世界共通の「文化発展段階の法則」を作りあげようとしたところに、根本的な誤りがあります。

だから縄文時代（新石器時代）といえば、従来は、洞窟や竪穴住居などの「穴ぐら」に住み、半裸の姿で髪をふり乱しながら、弓矢や石斧を振りかざして鳥やケモノを追いまわし、自分も鳥獣のようなテリトリー（縄張）を主張し、その狭い領域内で個々の集落が自給自足の生産や生活を営んでいた。そして、その縄張

を侵す者があれば、弓矢や石斧を振りかざして、まさに死闘をくりひろげるといった、そんな閉鎖的で排他的な、「野蛮」で「未開」な時代であったと考えられてきたのであります。

しかし縄文人は、すでに弓矢や陥し穴を発明し、イヌを飼い馴らして集団的な狩猟を行っております。とくに世界で最初に「縄文土器」というユニークな土器の製作技術を発明し、竪穴住居を建てて定住生活をはじめ、共同的な集落を営んでおります。しかも独木舟まで発明し、川や海を渡って遙か離島にまで往来し、また山深い内陸にも至るところに足跡を残しているのをみても、新しい資源や生産を求めていかに各地を活発に開発していたかがよくわかります。こんな時代を、それほど単純に捉えることができるのでしょうか。

(2) 海への挑戦

ところで東京湾は、太平洋に向かって口を開きながら、その懐は関東盆地の中央に向かって内陸の奥深く入りこんだ袋状の大きな内海であります。そのため、内陸の山岳や台地からの河川を集め、その陸水と土砂の流入によって、東京湾は遠浅で砂泥性の海底をなし、鹹度が低く潮流は穏やかで日溜りになるので水温は高く、プランクトンの発生に適している。そのため、二枚貝が繁殖し海苔などの海藻が繁茂します。だから、内湾性の魚類が群棲し、しかもマイワシやマアジなどの回遊魚が出入りするのです。それを追って外洋性の魚類もしきりに侵入するといった、東京湾はまさに居ながらにして海産資源の宝庫であります。

しかし、資源があれば、おのずから生産がはじまるかのごとき自然決定論的な把握は大きな誤りであります。たとえ豊かな資源があっても、それを食糧として認識し、それを確保しようという意志をもって、実際に海に挑んで、それを確保しうる道具と技術を開発しなければなりません。たとえば、先土器時代においては、貝類も魚も採捕していないし、海岸に近いところには足跡さえ残していません。それは、時には人間の生命など簡単に呑みこんでしまう海という大自然の驚異をよく知っていたからに相違ありません。

ところが縄文人は、はじめて貝類を採捕し、各地に多数の貝塚を残しています。

しかも同時に、ヤス・モリ・釣針・網（浮子・錘）、独木舟などを発明し、実際に各種の魚類を捕えていたことが、貝塚から検出される動物遺存体によって知ることができます。とくに、イルカやクジラなどの海獣類もかなり大量に捕獲しているので、独木舟や網などを駆使しながら、つねに組織的な共同漁撈を行っていたことがわかります。このように、従来の植物採集や狩猟活動に加えて新しい漁撈活動の開始こそは、縄文人の食糧を急激に増加させ、縄文文化を飛躍的に発展させる大きな原動力になったはずであります。

(3) 千葉県は貝塚の宝庫

縄文時代の貝塚は、日本全国でおよそ1,100ヶ所を数えますが、そのうちの約7割の800ヶ所が関東地方に偏在しており、約半数の560ヶ所が千葉県下に集中しています。ですから、かねて千葉県は縄文貝塚の宝庫として有名であり、なかでも千葉市域には全国の1割の110ヶ所が密集し、しかも大型の「馬蹄形貝塚」がもともと数多く発達した地域として、内外の注目を集めてきました。

このように、縄文貝塚の宝庫であるがために、従来この地域の縄文時代の遺跡というと、貝塚ばかりが注目され、それ以外の「貝塚を伴わない遺跡」については、ほとんど無視されてきた憾みがあります。ところが実際には、この千葉県下においても、貝塚以外の縄文遺跡が数多く分布しており、その数はむしろ貝塚の数倍を数えます。それは貝塚の最大の密集地の千葉市域においてさえ顕著であります。とくに、従来縄文貝塚というと、みんな同質同格なものだと考えられてきましたが、さまざまな様相を呈するものがあり、これを一概に捉えることはできません。

(4) 縄文遺跡の種別

そこで、千葉市域における縄文遺跡を、貝塚と集落との関係で整理してみると、少なくとも次のような5種類に大別できます。

A. 貝塚を伴わない集落……台地上の平坦部に、数戸から10数戸の住居址群が展開し、土器型式で2～3型式程度の短期間、継続して存続しているが、一般の生産・生活用具のほか、特殊な遺物や遺構はほとんど伴っていない。

B. 小型貝塚を伴う集落……台地の縁辺部に、数戸から10数戸の住居址群が展開し、その一部に、廃棄された住居址内に投入された小規模な貝塚を伴うほかは、「貝塚を伴わない集落」とほとんど変わらず、特殊な遺構や遺物もほとんど伴っていない。

C. 大型貝塚を伴う遺跡……台地の縁辺部に、直径100～200mの馬蹄形に展開する大型貝塚を伴い、その内外に数10戸以上の住居址群が展開し、その存続も断続的に回帰しながら、数型式以上の長期にわたっている。しかもこの種の遺跡にかぎって、土偶・石棒・装身具などの特殊遺物や、埋葬・埋葬墓壙・特殊住居址・大型住居址・巨大な竪穴などの特殊遺構が多数集中している。

D. 集落を伴わない貝塚……台地の麓の低湿地にやや規模の大きい貝層堆積を残しており、土器型式で5～6型式のやや長期にわたっているが、これも断続的・回帰性を帯びている。しかも、一般的な生産用・生活用の道具は乏しく、煮沸用土器の破片のみがわずかに含まれている。この貝層の周辺には、住居址など日常生活の痕跡もほとんど認められない(註9)。

E. その他時期・性格の不明な遺跡……地表面に貝殻や土器片が散っているが、その量や範囲があまりに僅少なため、その所属時期や性格を判別しがたく、たとえ発掘調査しても、おそらく集落以外の臨時的な行動の痕跡であろう。

(5) 各種遺跡の変遷

以上のように、貝塚と集落との関係で捉えられる5種の各遺跡も、縄文早期から晩期に至る各時期の様相が、それぞれに変動しております。つまり、各種遺跡ごとに、その生成－発展－衰退の過程が異なっているのです。その状況を調べるために、まず各種遺跡の数の増減によって概観してみると、第1表のようになります。

この表をみても歴然としているように、従来「貝塚の宝庫」といわれ、あたかも縄文時代の遺跡にはすべて貝塚が伴っていると考えられてきた、この千葉市域においてさえも、遺跡全体のなかでは、貝塚を伴う遺跡をすべて合わせてみても、わずかに14.4%を占めるにすぎません。そして、貝塚を伴わない集落の方がなん

第1表 千葉市域における縄文遺跡の種類とその変遷 (1986、K. Goto作成)

種類別	遺跡の実在数	時期別						全時期の 累計
		10,000	7,500	6,000	4,000	3,000	2,500	
A. 貝塚を伴わない 集落	(83.2%) 485 (72.0%)	(79.4%) 77	(79.7%) 55	(85.0%) 266	(82.8%) 264	(22.2%) 4		666
B. 小型貝塚を伴う 集落	(12.2%) 71 (10.5%)	(20.6%) 20	(17.4%) 12	(9.3%) 29	(10.0%) 32	(77.8%) 14		107
C. 大型貝塚を伴う 遺跡	(4.2%) 25 (3.7%)	0	0	(2.9%) 16	(6.4%) 22	0		38
D. 集落を伴わない 大型貝塚	(0.3%) 2 (0.2%)	0	(2.9%) 2	(6.4%) 2	(0.3%) 1	0		5
E. その他性格・時 期の不明な遺跡	91 (13.5%)	—	—	—	—	—		91
(性格・時期判明の遺跡) 合 計	(583) 674 (100.0%)	(100.0%) 97	(100.0%) 69	(100.0%) 313	(100.0%) 319	(100.0%) 18		907
							816	

※1. 各時期別遺跡数の累計は、1遺跡で数型式にわたるものがあるので、遺跡の実在数の合計とは一致しない。

※2. カッコ内の数字は、種類別の実在数および各時期別遺跡数の全体に対する百分率(%)を示す。

※3. ただし、下段は遺跡全体数に対する百分率、上段は性格・時期判明の遺跡数のみの合計に対する百分率を示す。

と72%を占めているのです。「貝塚とは何か」を的確に捉えるためには、まずこの事実をはっきりと認識しておかなければなりません。

さらに、従来「貝塚」として一括されていた遺跡にしても、「貝塚と集落との関係」という観点からみただけでも、小型貝塚を伴う集落、大型貝塚を伴う遺跡そして集落を伴わない大型貝塚という3種に分割され、しかも、それぞれの具体的な様相が異なっているばかりではなく、その生成—発展—衰退の過程が明白に違っているという事実もはっきり認識しておかねばなりません。このように、歴史的変遷の過程が異なるということは、それぞれの遺跡の機能や存在意義が違っていたことを雄弁に物語っているからであります。逆にまた、この歴史的変遷の相違によっても、以上3種の分類が妥当であることを立証しているのであります。

従来、こうした遺跡全体の総合的な把握もなしに、もっぱら貝塚遺跡だけを取りあげて、たとえば貝塚の規模や形態などの皮相的な現象によって集落を論じたり、貝塚密集地帯の縄文集落全体を論じたり、ついには、それによって当時の社会組織まで論ずるといった傾向がありました。とくに、今回は時間の関係で、貝

塚遺跡の範囲や集落遺跡の範囲について詳しく論ずる余裕がありませんが、貝塚の分布範囲をもって集落の範囲とするような微視的な観点では、集落はおろか、「貝塚とは何か」という問題を客観的かつ正当に捉えることなどは、到底不可能であります。ここにこそ、観点の重要性があるわけです。

3. 従来の貝塚機能論

「貝塚とは何か」については、従来あらゆる考古学者が、「人民食糧残滓の塵芥捨場」、(註10)とか、「日々の食べかすを捨てたゴミ捨場」(註11)などと把握しているので、それが学界や一般の常識となっており、もはや疑うべくもない真理であるかのごとき先入観を与えています。しかし、その根拠は不明確で、その把握は決して適切ではありません。むしろその先入観こそ、貝塚の存在意義や機能を見失う大きな原因となっているのであります。その根拠を示しながら、その他のおもな説を検討してみなければなりません。

(1) 貝塚＝「ゴミ捨場」論

近代考古学発祥の地であるデンマークにおいては、1840年代までの貝塚研究といえば、もっぱら動物学者による貝化石の研究に終始しておりました。ところが、1850年代になって、A・ウォルセーなどの考古学者によって、エルテベレー貝塚から土器・磨製石器・骨角器などの人工遺物や埋葬人骨まで発見されるに至りました。これが、いわゆる「新石器時代文化」を認定する契機ともなったわけです。それをみた動物学者のステーンストルップは、この人為的な貝塚を従来の自然貝層と区別するため、“Kjökkenmøddinger”と呼んだのであります。そこには、はじめて人為的貝塚を発見した記念碑的な意味も込められていたのです(註12)。

ですから、東京都大森貝塚を発掘したモースも、その貝塚の様相がエルテベレーに似ていることから、これを新石器時代の貝塚であると判定し、これを英語の“Kitchen-midden”すなわち「ゴミ捨場」という用語をさけて、わざわざデンマーク語で“Kjökkenmøddinger”と表現しています(註13)。だが、そんな背景やそこに込められた学史的意義も知らない当時の日本人が、それをそのまま「ゴミ捨

場」と直訳してしまった。それ以来、日本の考古学界では、縄文時代の貝塚は「ゴミ捨場」以外の何ものでもないと固く信ずるに至ったのであります。いまでも、そのような先入観から抜けきれない考古学者が少なくありません。

もともと、この「ゴミ捨場」という言葉には、文化的な意味も歴史的な意義もありません。貝塚を「ゴミ捨場」と呼ぶのは、ローマの闘技場でも各地の国分寺跡でも、一括して「廃墟」と呼ぶのと同じであります。たとえ結果論的にそれが「ゴミ捨場」であるにしても、縄文人が実際に海中から貝類を採捕し、それを投棄するまでの具体的な活動の内容や、縄文人の抱いていた目的や意志や、その歴史的な意義を究明することこそ、考古学の任務であります。それを、ただ「ゴミ捨場」であると片づけて事終れりとすれば、そこからはなんらの意義も生まれてはこないのです。

とくにわれわれが、「ゴミ捨場」というとき、知らず知らずのうちに、現代のわれわれの日常生活における経験やイメージにとらわれて、貝塚は個人的な消費生活の結果であるという先入観が働いて、その先入観があたかも絶対的な前提であるかのごとき錯覚に陥っている考古学者が意外に多いのであります。

(2) 大型貝塚＝「ムキミ屋」説

このような「ゴミ捨場」説一辺倒であった従来の考古学界の貝塚把握に対して、最初に疑問を抱き、その再考を促すべき新説を提示したのは、小説家の江見水蔭でありました。たとえば、「貝塚に就て」（註14）という論文のなかで、次のように述べております。彼はまず、貝塚の定義については、「いろいろ斯学の学者により述べられているが、皆同一で、貝塚をもって古代の物捨場なりとしている。無論それは物捨場には相違無いが、それよりも今少し考を進めて、今日のムキミ屋的な者の遺した跡と云ひたいのである」といっております。しかも、「単に貝類を食ひ、その殻を捨てたのではなく、貝をむきてそれを他に送ったもので、今日と等しく分業法が行はれていたものと思ふ」といい、「専門的に貝類を漁る者ありてムキミとし、諸方面に送ったもので、その居住した場所は、貝塚として今に遺っているのであると思ふ」というのであります。

この提案は、縄文時代というものを自給自足による閉鎖的で排他的な低い文化段階にあったと考え、それを前提としていた当時の考古学界においては、一笑のもとに無視されてしまいました。従来の偏狭な観点から脱却する折角のチャンスであり、それほどその説は先駆的な観点として、まさに先見の明であったはずであります。これに対して同意を表明したのは、考古学者よりも形質人類学や生理学の専門で、縄文人こそは「日本原人」であることをはじめて実証した清野謙次でありました。彼は、江見水蔭の説を発展させて、次のように述べております。

「貝塚の部分によっては非常に多量の同一種の貝殻計り出て来て」、「是は短時間中に獲れた証拠で、斯く計り多量の貝殻が貝塚の住民丈けの食糧にのみ使用せられたとは思はれない。其れと同時に、土器やら石器やらが、遺跡地の各所から固まって出て来るのは、明らかに、一程度迄は石器時代に分業が行はれた事を証する。介類採集も貝塚住民には多少分業的の職となって、漁撈の多い時には海岸線に遠い地方の住民に物々交換の材料に使はれたのであろう」（註15）といっております。

このように、従来の縄文文化の把握に対して、より高度な段階で捉えようとする新しい観点が、考古学のなかからではなく、周辺分野にあった人びとから提示されたところに、重要な意味が秘められております。すなわち、いくら新しい資料や事実が増加しても、それを捉える観点の進展がないかぎり、決して新しい解釈も意義も生まれません。だから、発想を転換し新しい観点をもつには、常に定説に懐疑をもち、原点にたちもどって、より本質的な問題を追求する必要があるのです。

(3) 馬蹄形貝塚＝馬蹄形集落説

ところで、戦後間もない昭和23年に、思想・言論・学問の自由が保障された暁鐘のごとく、和島誠一の「原始聚落の構成」（註16）が発表されました。それは、従来の考古学研究にもっとも欠落し、しかももっとも本質的な社会組織の問題が、それまでの考古学的成果をもとに実証的に提示されたので、当時の学界に与えた影響はきわめて甚大でありました。そのなかで、すでに千葉市域の「馬蹄形貝塚」

が取りあげられ、それが社会組織によって規定された集落の形態を示す一つの典型として捉えられ、その中央の空白部に、集落結集の場としての意義がはじめて与えられたのであります。

しかも和島誠一は、昭和30年に横浜市の南堀貝塚のほぼ全域にわたる発掘調査を行い、縄文前期（黒浜・諸磯期）における一集落の展開の様相を把握しました。その結果、馬蹄形に展開する住居址群の中央に空白の広場があり、そこに大型の焚火址と石皿が存在したことから、その「中央広場」こそ、馬蹄形集落の構成員結集の場であったと主張しました（註17）。

この南堀貝塚の発掘調査に参加し、和島誠一の感化を強く受けた若き考古学者に、岡本勇と麻生優の両氏がおります。まず麻生優氏は、昭和35年に「縄文時代後期の集落」（註18）において、ほぼ全域を発掘した浜松市の蜷塚遺跡をはじめ、市川市の堀之内貝塚や曾谷貝塚など実測図が整っている大型貝塚を取りあげ、この3遺跡には、食糧残滓のゴミ捨場としての貝塚、生活の場としての住居址、埋葬人骨の偏在する共同墓地などに共通性があるとして、次のような仮説を提示しました。

前述の3遺跡のように、「自然環境が異なるにもかかわらずその条件を克服して馬蹄形貝塚が生れた」のは、「一つの社会組織のもとに制約—規定された結果もたらされたもの」であって、「そこには、自然条件を克服して、地域性を超越して、縄文時代後期の社会組織のしくみから必然的にもたらされた結果としての馬蹄形集落が存在する」というのであります。すなわち、「馬蹄形集落の中で生活している人々は、この共同規制を破らない限り勝手に他の場所に住居をつくることはなし得なかったのではなかろうか。今まで集落の中心をなす広場から全く住居が発見されないのは」、「共同体を支える重要な共通の広場としての役割を担っていたものと考えられる」としています。

岡本勇氏も、昭和35年に「加曽利貝塚の意義」（註19）において、同じような仮説を提示しております。すなわち、一般に馬蹄形や環状を呈する大型貝塚は、「ゆうまでもなく集落に付随したものである」が、「ここで発見される住居址は、

いずれも貝塚の部分の貝層下や貝層中に限られており、したがって住居址の分布は、大きくみて馬蹄形をあらわしていたと考えられ、結局「住居のあり方が貝層の分布を規制した」のだというのであります。ここに、馬蹄形貝塚＝馬蹄形集落の観点が明確に表明され、それ以来、この仮説が学界の定説のごとく喧伝されてきました。

以上のごとく、従来の貝塚研究が貝塚だけを中心にして、貝塚そのものの現象からいきなり貝塚の機能や意義を推定しようとする傾向にありました。とくに、貝塚のなかでも馬蹄形貝塚とよばれる大型貝塚だけを取りあげ、それが当時の集落の典型として捉えられております。その集落も、貝層部の形状によって、その内側にのみ集落の範囲や形態を限定し、特定な遺跡のみを選びながら、その共通性によっていきなり社会組織を論じています。これは、従来の考古学の一般的な傾向ですが、いかなる現象も、その局部をもって全体を論ずることは間違いであり、それ自体を個別に論じてもその意義は定着できません。当然、全体のなかの位置づけや他の現象との有機的な関連によってこそ捉えるべきであります。

4. 大型貝塚の特殊性

(1) 大型貝塚の様相

さきにあげた第1表をみても明らかなように、全国でもっとも縄文貝塚の密集している千葉市域においてさえ、東京湾を控えた同じ自然条件の台地上にありながら、むしろ貝塚を伴わない集落が大半（約72%）を占め、貝塚を伴う遺跡は全体の14.4%にすぎず、とくに大型貝塚を伴う遺跡などは、わずかに3.7%を数えるにとどまる。すなわち、馬蹄形貝塚は、当時の集落の典型どころかごく特殊な存在であったことがわかります。

しかもA～Dの4種の遺跡の早期から晩期にいたる間の生成－発展－衰退の歴史的過程をみると、まず貝塚を伴わない集落と小型貝塚を伴う集落は全時期に存在し、その変遷の様相もほぼ共通性をもっています。ところが、大型貝塚を伴う遺跡と集落を伴わない大型貝塚だけは、早期にはまだ出現しておらず、前期末か

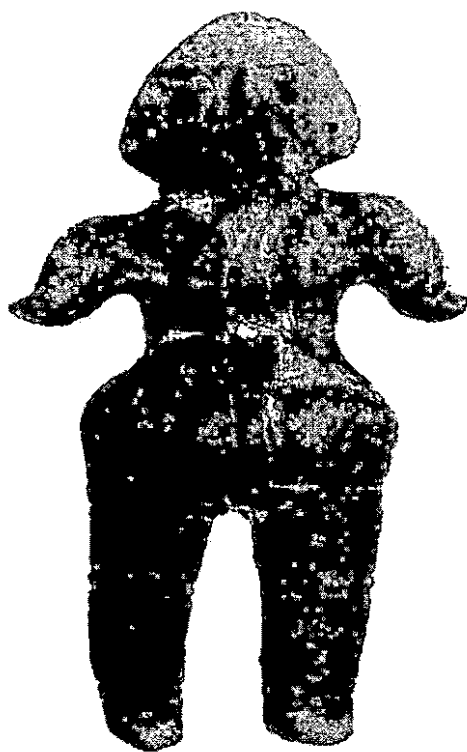
ら後期にかけて急速に発達するが、晩期になるとにわかにはほとんど消滅しています。このように、遺跡全体のなかにおける各種遺跡のあり方をみても、大型貝塚を伴う遺跡がごく少数に限られた遺跡であり、一般的な変遷とは別途の消長をもつ、きわめて特殊な存在であることは、すでに十分に表明されております。

そこで、その特殊性の意義・内容を捉えるために、より具体的な現象を取りあげていかなければなりません。とくに、大型貝塚を伴う遺跡だけには、土偶・石棒・装身具などの特殊遺物や、墓壇・特殊住居・巨大な堅穴などの特殊遺構が集中しており、そのほかの遺跡からは、それらのものがほとんど発見されないか、たとえ伴っていてもごく一部のものが少数しか出土しないという現象があります。

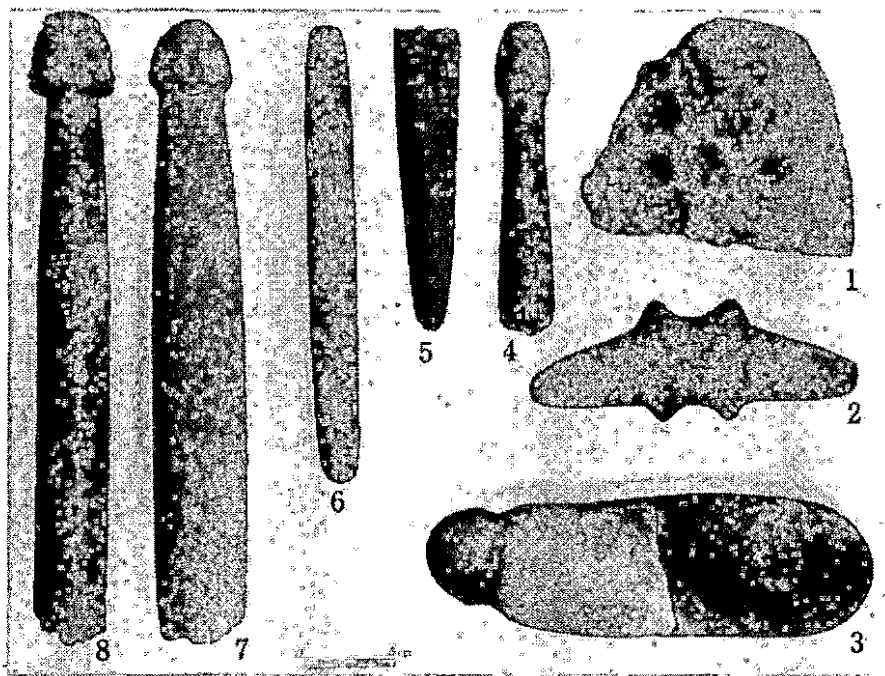
(2) 特殊遺物と特殊遺構

東京湾沿岸における縄文遺跡から発見されるおもな特殊遺物と特殊遺構として、次のようなものがあげられますが、それらのそれぞれの存在意義については、いまだに明快な定説がありません。そこで、かねてより提示してきた私の仮説をここにまとめておきます。

A. 土 偶……………縄文早期から晩期にかけて断続的に伴出し、とくに後期にもっとも発達する。すべて女性をかたちづくり、乳房・正中線・腹部・腰部・陰部などの性徴を強調し、妊娠状態を表わすものが多い。ほとんどがバラバラに破損して出土するが、人骨埋葬と同様な状態で発見されるものもある。安産を祈願する呪術的な「^{ハル}髭代」で、その願いがかなうと叩き割り、失敗すると再生を期して埋

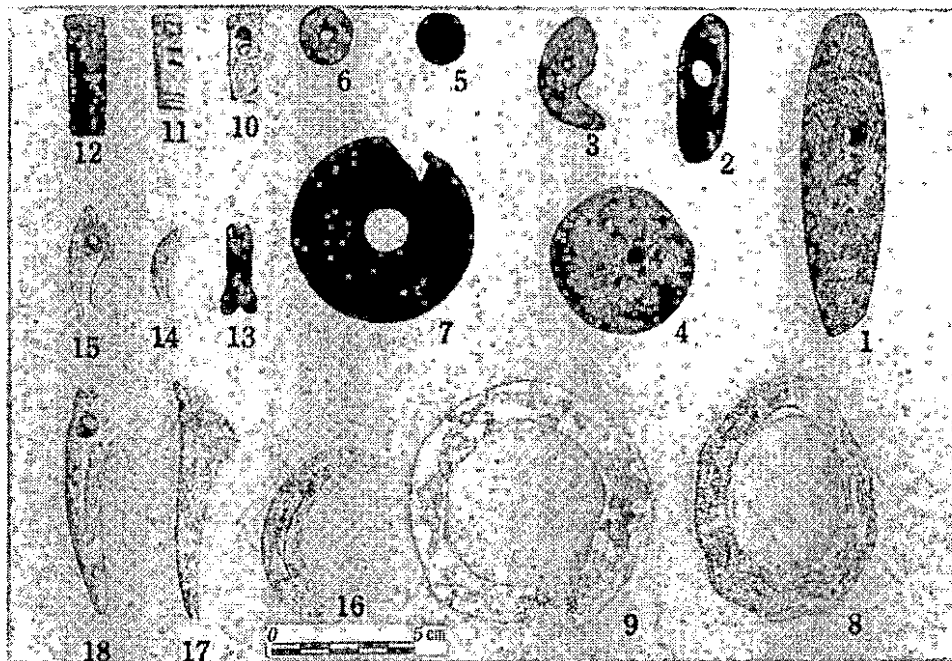


第1図 土偶(縄文後期・加曾利貝塚出土)



第2图 特殊石製品（加曾利貝塚出土）

1. 多孔石, 2. 两刀石斧（独钻石）4. 5. 石剣, 3. 6~8 石棒



第3图 装身具（加曾利貝塚出土） 1~4. 垂飾, 5. 6耳栓, 7. 滑車型耳飾,

8. 9貝輪, 10~12鳥骨製髮飾, 13~18骨角牙製腰飾

葬したもの（第1図）。

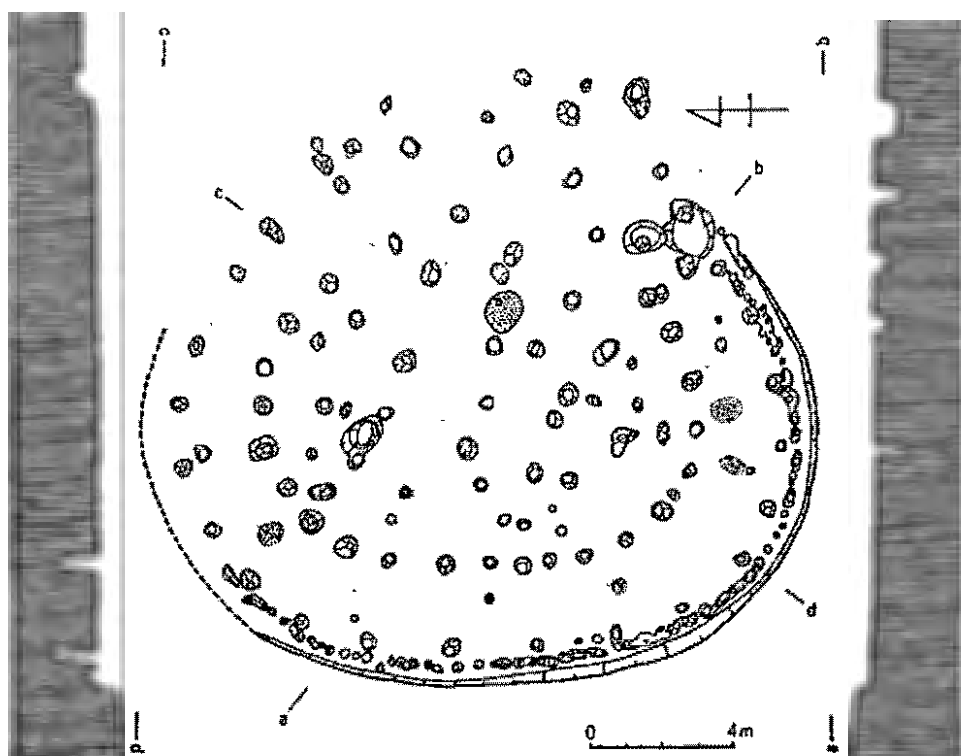
B. 石棒……縄文中期から晩期にかけて作られ、当初は中部地方前期のストーンサークルの中央立石であったものが、石柱祭壇となり、それが石棒になって敷石住居などに安置されていたが、後期になると小型化し儀仗化し、晩期には側面に稜がついて石刀・石剣となる。ストーンサークルなどの共同墓地や特殊遺構に伴うので、共同体の血縁のシンボルのような呪物であったに違いない（第2図）。

C. 装身具……鳥骨製のヘアーピンをはじめ、硬玉製の玦状耳飾・土製耳飾・ヒスイ製の勾玉・蛇紋岩製の大珠・貝製腕輪等が、縄文前期から晩期にかけて多くなる。これらは、女性人骨が着装した状態で発見される例が多く、男性人骨に伴うのは、ケモノの骨・角・牙に穴をあけ、紐に通して腰にぶら下げた腰飾だけである。このことから、これらは単なるアクセサリではなく、男女の区別や既婚・未婚の別などを示すための呪術的な道具だった（第3図）。

D. 埋葬遺構……一般成人の場合、死後硬直の状態に合わせて掘った竪穴の中に、直接土葬にするが、流産児や死産児は底を打ち欠いた甕の中に入れて埋葬する。お産のために死亡した女性は頭部に甕をかぶせる。未成年の少年・少女の場合、以上のような埋葬例がなく、散乱状態や集積状態で発見されるので、おそらく一旦洗骨してから再埋葬したのであろう。

E. 抜歯風俗……従来、成人式に抜歯を行ったと考えられていたが、発見される成人男女の約半数ずつしか抜歯が認められず、その抜歯の位置も数種のものが共存する。これは、族外婚制により、他の集団から婚入する男女のみが、生まれ育った土地の霊を断ち切るために行ったもので、その抜歯の位置もその出自によって区別される。しかも、死亡すると、同じ出身の者はそれぞれ同じ地点にまとめて埋葬する傾向があったという。

F. 特殊住居址……従来、「敷石住居」とか「柄鏡形住居」とか「大型住居」などと呼ばれてきたもので、その規模・形態・構造等が日常的な住居址とはまったく違っており、その床面からは一般的な生活・生産用具の出土が乏しく、む



第4図 特殊遺構の実測図



第5図 台付異形土器 上の特殊遺構から出土。

しろ石棒・土偶・装身具・特殊異形土器などが発見されるので、普通の住居址とは考えられない。これらは、加曾利貝塚や佐倉市吉見台遺跡や我孫子市宮前遺跡発見の「巨大な竪穴」と同様、何か祭祀的な行事を行った特殊な施設であった（第4図・第5図）。

以上の特殊遺物や特殊遺構の意義については、まだ究明すべき多くの課題を残しているが、それらが決して一般的なものではなく、「特殊」な存在であることだけは何人も否定できないところであります。しかも、一般の集落から発見されることはほとんどないのに、大型貝塚を伴う遺跡など特定の遺跡においてのみ、各種のものが多数集中的に伴出することは、その遺物や遺構の特殊性とともに、この種の遺跡自体の特殊性を表明しています。だから、大型貝塚を伴う遺跡は、すでに一般集落ではなく、特殊な遺跡であることを十分に暗示しております。そして、その特殊性の意義・内容こそ問題なのであります。

(3) 大型貝塚と小型貝塚

ところで、一口に「貝塚」といっても、その規模・形態・堆積状態・貝層組成などによって、いろいろな種類に分けられます。とくに、規模や形態ばかりでなく、そのような結果をもたらした貝類採捕の活動自体の相違によって分けると、大きく大型貝塚と小型貝塚とに二分することができます。

たとえば、小型貝塚というのは、従来「点在貝塚」とか「地点貝塚」とかと呼ばれていたもので、台地の縁辺の斜面や廃棄された住居址などに、各種・各様の貝殻が少量ずつ投棄されている。貝殻の成長線分析によると、その採捕の季節は春夏秋冬の全時期にわたっている。とくに、住居の近くに密接していることから、これこそ日常生活の消費的廃棄で、従来考えられていた「ゴミ捨て場」であったに違いありません。

ところが、大型貝塚というのは、従来「馬蹄形貝塚」とか「環状貝塚」とかと呼ばれてきたもので、本谷や支谷に臨む台地末端のぎりぎりの平坦部に、直径100～200mの馬蹄形や環状に展開している貝層堆積群を指します。この貝層断面をみても明らかなように、ハマグリ・シオフキ・アサリ・キサゴなどの特定の貝類を一度に大量に採捕し、住居から離れた特定の平坦部に集中的に投棄している。しかも、その採捕の季節もおもに春先に限定されていたことがわかっております。これは、日々の食糧残滓を各自が捨てた日常的な「ゴミ捨て場」であったとは到底考えられません。

両者の存続期間を比較してみても、一般に小型貝塚はごく短かく、大型貝塚は断続・回帰しながらもきわめて長い。そこで従来、両者の相違はその存続期間の長短や集落内人口の多寡によるものであるとし、小型貝塚が長期にわたれば、やがて大型貝塚になると考えられてきました（註20）。両者が別々の位置にあったり、時期的に前後していれば、その可能性も否定しがたいが、実は両者は、同一地域の同一時期に共存しているのです。

その典型的な例として、昭和45～47年度に行った加曽利貝塚の老人ホーム建設に伴う遺跡限界確認調査の結果、南貝塚の外側から多数の住居址が発見され、そのうちの約半数に小型貝塚を伴っていました。すなわち、同じ台地上にある同じ遺跡内において、片や馬蹄形を呈する大型貝塚があり、その周辺には小型貝塚を伴う住居址群が同時に存在していたという事実が確認されたのです。これによって、従来の馬蹄形集落論もゴミ捨場論も成立しなくなりました。そして、それと同時に、大型貝塚と小型貝塚とは同質・同格のものとして混同することは許されず、大型貝塚の存在自体の特殊性も確認されたのであります。

(4) 大型ハマグリ採取法

ところで大型貝塚には、殻長5～7 cmほどの中型のハマグリが大量に堆積しております。小型のものでも殻長3～5 cmほどもありますが、こうしたハマグリが、実際にはどのようにして採捕されていたのか、私は15年ほど前から各地の漁村を訪ねて、直接漁師に聞き取り調査を行ったところ、意外な事実を知りました。それ以来約10年にわたって、その確認のための調査を行った結果、ほぼその実態を捉えることができました。

もともとハマグリは、3～5年たつと、湾内のもっとも深く潮流の静かな海底で精子と卵子を放出する。海水中で受精した卵子は、目に見えないプランクトンとして潮流に浮遊しながら、まず波打際に定着します。それから、砂泥の表層に潜りながら、大きくなるに従って次第に沖に出ていきます。それが殻長3～4 cmほどになるには、干潮時でも海深1.5～2 mの沖合に達しているのです。昭和初年からは、海深0.5～1 mほどの河口部に蛸集する稚貝を買ってきて、それを波打

際に戻し掻きをする半自然的養殖が行われてきたので、東京湾沿岸においては、すでに自然繁殖の状態は見られない。その「戻し掻き」でも、ハマグリは殻長が3～4 cmになるには、春先の最大干潮時でも、「みよ」以外の高洲で海深1～1.5 mのところまで進んでしまうのであります。

そこで浜の衆は、焼きハマグリなどに用いるのに適当な殻長3～5 cmのものを採るには、干潮時に胸ほどの深さの沖に出て、「アサリカキ」という先端に鉄の爪のついた竹箆に長い柄と綱をつけ、柄を肩に担ぎ綱を腰に巻いて、あとずさりしながら海底を引掻く。これを「腰巻」といっています。また、それ以上大きいものを採るためや満潮時のときには、ベカ舟2艘が1組になって、イカリで舟を固定してから、より長い柄と2本の綱をつけたアサリカキを使って、その綱の両端を双方の舟につけたウインチで捲きあげながら、海底を引っ掻く。これを「大巻」と呼んでいます。

いずれにしても、縄文時代の大型貝塚に累々と堆積している殻長5～7 cmのハマグリは、自然繁殖の状態です。少なくとも海深2 m以上のところでなければ採れなかったはず。だから縄文人は潜って採ったか、あるいは独木舟を操り、アサリカキのような道具を使って、海底を引っ掻きながら、一括して採っていたに違いないのです。キサゴのような比較的浅い河口部に蛸集繁殖する小貝も大量に採っていますが、それを1粒ずつ拾ったとは思えません。一括して掻き寄せる何らかの道具がすでに考案されていた可能性は十分にあります。ただ現在のところ、まだそれが遺物として発見されていないだけであります。

しかし、かつて子供のころ、東京湾の遠浅の海岸において、一日の行楽として「潮干狩」を体験したため、そのときの記憶によって、殻長5～7 cmのハマグリさえ、ズボンをまく程度の浅瀬でも多少拾うことができるものだと思っている者が意外に多いのであります。実は私も、なまじ「潮干狩」が好きで、再三、稲毛の海岸で体験していたため、15年前までは、そうだとばかり思いこんでいました。

5. 生産活動の実態

(1) 「潮干狩」のからくり

考えてみると、浜つきの漁民にとっての海岸は、内陸の農家の田畑同様に貴重な生産基盤であります。江戸時代から、この漁撈権をめぐる漁村間の境界争いが絶えなかったのも、そのためであります。そこで浜の衆は、漁業組合を結成し、入浜権を設定し、その証明に各自が鑑札を所持しなければ浜で漁はできない仕組みになっております。また、この入浜権に対して、税金もかけられたのであります。それなのに、なぜ春先の一定期間だけ、特定の海岸が「潮干狩」の行楽地として一般に開放されていたのでありましょうか。

実は、これも漁業組合の共同事業であり、「潮干狩」を行うには、関係諸官庁に届出が必要であり、とくに警察署からは行楽客の水難防止のため、「安全区域」の縄張表示をすることが義務づけられております。これは、海面をみると水平に見える遠浅の海底にも、実は複雑な「おぼれ谷」や川筋があって、随所に「みよ」という深みをつくっています。そこに潮流が逆流したり水温が極端に冷めたかったりして、遊泳者がそこにはまって死亡する事故が多いからであります。実は、潮干狩解禁の前に、その「みよ」を探して縄張をするベテランの漁師さえ、時には「みよ」にはまって死亡する例が再三あったそうです。

このように、海という大自然の摂理は、時には人間の生命など簡単に呑みこんでしまう偉大なる驚異であります。だから現代でも、海と共に生きている漁師たちほど、「船板の下は地獄である」ことをよく知っており、海を知らぬ人間ほど海を侮り、あっけなく生命を落としています。海についての知識も、実は、人間が長い間、命がけの試行錯誤によって、一つ一つ獲得してきたものであります。そのために、どれほどの人間が犠牲になったことか想像もつきません。

ところで、そのような縄張区画のなかに、漁師たちはあらかじめ沖で採っておいたハマグリの一部を、全面にばらまいておくのです。観光客たちは、干潮の間一生懸命貝を漁りますが、アサリばかりでハマグリは滅多に見つからない。1つ

2つ掘りあてたころ潮が満ちてきて岸にあがらねばならない。残念に思いながら帰ろうとすると、その道の両側で浜の衆が袋につめたハマグリを売っているのがあります。すなわち「潮干狩」とは、浜の衆の現金収入のために計画された共同の営業であり、ハマグリを売りつけるための「おとり」作戦だったのであります。

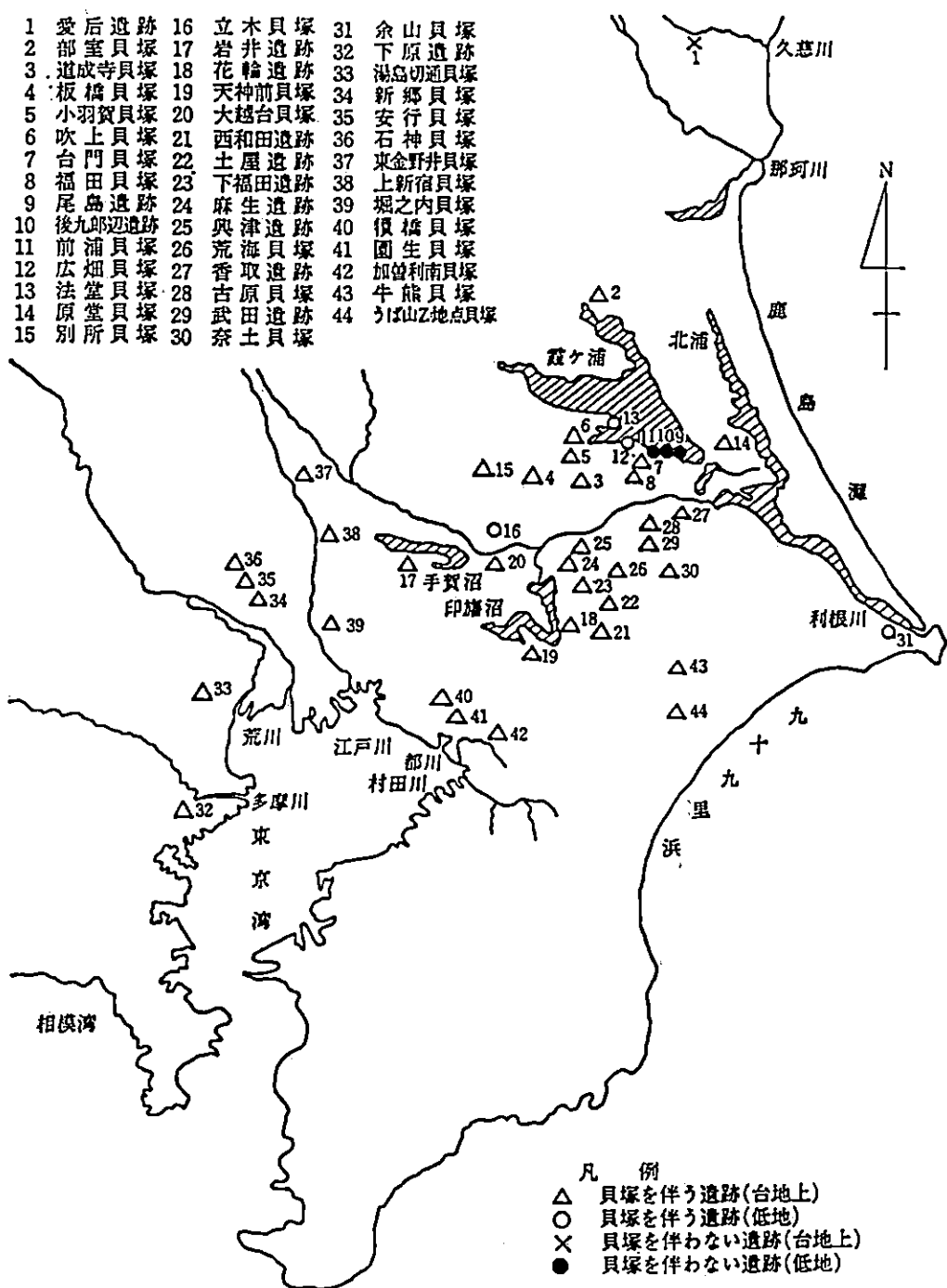
このような現実における生産者の実態を知らずに、縄文時代の具体的な生産活動というものを机上の空論をもって論じてみても、それがいったいどれほどの意義をもつてありましようか。まずわれわれは、いまなお実際に行われている漁撈活動の実態を調査して、その本質的な技術や知恵を学ぶ必要があります。

(2) 製塩の開始

さきに示した第1表の各種遺跡の変遷のなかで、縄文晩期になると、それまで最大の隆盛を極めていた大型貝塚がにわかに消滅的な現象をみせています。この原因については、あまり乱獲したので、貝類が絶滅したからであろうというのが従来の解釈でありました。ところが、ちょうどその時期に、霞ヶ浦沿岸を中心に、突如として縄文人が製塩をはじめているのです。この製塩の開始と大型貝塚の消滅とは、決して無縁でも偶然の一致でもありません。

なぜならば、わが国には岩塩とか塩湖などのように、自然に結晶し簡単に採掘できる資源がありません。塩を得ようとすれば、すなわち海水を蒸留乾固しなければなりません。おそらく、わが国における製塩のはじまりとして、海水を土器で煮沸し、水分を蒸発させて塩を結晶させるという「土器製塩法」を発明したのが縄文人であったのであります。すなわち、この塩の製造も貝の採捕も海が介在しなければ成立しません。その2つの生産が、同じ関東南部において同じ時期に交代していることは、むしろ、一方の発生によって他方が消滅するほどの密接な関係にあったとみるべきでありましよう（第6図）。

では、縄文後期まで塩の製法も知らず、鳥獣の肉や魚貝や木の実や野草などを食べていて、他の動物のように別に食塩の摂取を必要としなかった縄文人が、なぜ後期末から晩期初頭にかけて、にわかに塩を必要とするようになったのでしょうか。その塩とは、もともと血液の塩分補給や嗜好の味つけのためだったとは考



第6図 関東地方における縄文時代の製塩遺跡分布図

(常総台地研究会作製、1972)

えられません。それは、中期から後期にかけて盛んになった貯蔵穴や貯蔵用土器の存在などから、むしろ食糧貯蔵のための防腐剤としての効用に目をつけたに違いありません。なぜならば、集落が定着的になるにつれて、食糧の保存が不可欠の条件となってきたからであります。

したがって、塩の効用を発見しその製法を発明した縄文人が、それまでしきりに採っていた貝類も、ただ単なるその日その日の消費的な食糧ではなく、保存食糧として、塩の代りをしていたものと考えられます。

(3) 「干貝」の共同加工

一般の集落においては、そのほとんどが貝塚を伴わず、ただ一部の集落に零細な小型貝塚を伴うだけなのに、特定な特殊遺跡においてのみ、大量の貝類が採捕され集中的に投棄されているのは、なぜなのでしょう。当時の社会には、貝の嫌いな人、貝がちょっと好きな人、それに貝が滅法好きな人が別々のムラに住むという習慣でもあったのでしょうか。とんでもない話です。

大型貝塚をみると、中央の空白部を中心にして、貝を大量に投棄する位置が同心円周上に展開しながら幾重にも重なって、最終的にはそれが連らなって、「馬蹄形」や「環状」を呈しています。しかも、その貝層堆積の場は同時期の住居址とは直接結びつかない特定な場所が長期にわたって選ばれているのです。そして、その貝層の上には、随所におびただしい数の大型の焚火址があり、その周辺には煮沸用土器の破片が散在しています。とくに、当時の海汀線と貝塚までの距離や立地を考えてみても、決して日常的ではありません。わざわざ独木舟で東京湾まで数キロほど漕ぎ出し、大量の貝類を共同で採捕し、それを独木舟に積んで川を遡り、特定な台地上まで担ぎあげて、集中的に投棄しています。これらの現象を総合すると、大型貝塚とは、保存食糧としての「干貝」を加工する、共同生産の場であったに違いありません。

すなわち、木々や雑草を切り開いた広場で、貝類をいったん土器で煮て、口を開いた殻から身だけを取り出し、それを陽当たりがよく風通しのいい中央の広場で、ムシロやアンペラの上に拡げて、天日に干すのであります。生のまま貝殻を

こじ開けるのは、鉄の刃物のなかった当時では無理ですし、また生のまま天日に干すと、海水中のバクテリアと貝の酵母と太陽の輻射熱によって、たちまち腐ってしまいます。いったん煮ると、バクテリアや酵母は死滅し、蛋白質は凝固し、水分が抜けるので、乾燥が早く腐りにくい。現代の「干貝」も、必ず煮たりふかしたりしているのも、そのためであります（註21）。

このように、大型貝塚における貝層堆積の状態をみると、春先という特定の季節に限って、大量の貝を一度に採捕し、同じ場所に集中的に投棄するという一連の作業には、常に共同的な行動が伴っており、大勢の人びとの共通の目的や意志が秘められた場所であることは明らかであります。それを私が、干貝加工の共同生産の場であると解釈したのは、実は以上のような大型貝塚そのものの様相だけから推定したものではありません。実は、その干貝加工の目的や意志こそ、当時の社会を解明する重要な鍵となるからであります。

6. 大型貝塚と社会組織

(1) 生産形態と社会組織

以上のように、大型貝塚を伴う遺跡が、干貝加工という共同生産の場であるならば、当然、それに伴う当時の社会組織というものを考えなければなりません。一定の生産形態には、その背景に必ずそれを実現し維持すべき一定の社会組織が伴っているからであります。従来のように、自給自足による閉鎖的で排他的な孤立社会として捉えるなら簡単ですが、そうではないとなると、それは本質的な問題として、当時の社会組織そのものから考え直さなければなりません。

その点、加曽利貝塚博物館において、昭和41年の開館以来私の観点によって、博物館の研究事業の一環としてこつこつと行ってきた各種の研究は、20年間も積み重ねてきただけに、その総合的な成果は意外に大きいのであります。たとえば、縄文土器の製作技術の実験的研究、鉱物資料の原材である岩石の原産地および交易ルートの研究、動物遺存体の分析による狩猟・漁撈の実態の研究、それに全国の縄文時代の貝塚と集落との関連に関する研究などであります。とくに、度重な

る破壊の危機に直面しながら、その都度、何とか加曽利貝塚の存在意義を現地に確保しようという、切実な必要性から必死になって行ってきた「遺跡限界確認調査」こそは、ほかのいかなる研究機関も研究者もなしえないほどの大きな成果をもたらしたと信じています。

それぞれの成果については、その研究委託をした先生方から御講演もあり、すでに、その報告書（註22）も公刊されていますので、ここでは詳しくは述べません。ただし、これからお話する内容のなかに関連することだけについては、その都度簡単に触れることにします。まだまだ考古学界でも、その重要性に気づかない者が多いようですが、やがてそれを認めざるをえない日がくるであります。

（2）山の幸と海の幸

ところで、沿岸地帯では一年中貝が採れるから、自家消費のためなら何もわざわざ干貝に加工して保存する必要はなかったはずです。だからこそ、一般的な集落の大部分には貝塚が伴っておらず、また小型貝塚を伴う集落においては、四季を通じて少量ずつの各種の貝類が投棄されているのです。したがって、大型貝塚において、特定の時期に限って大量の貝を集中的に投棄しているのは、その貝類採捕の目的が別のところにあったことを歴然と物語っているのです。

実は、大型貝塚の密集している東京湾の東沿岸地域は、古来「石なしの国」と呼ばれ、硬い石材がほとんど産出しないところであります。しかし縄文時代は、木を切り倒す磨製石斧にしても、穴を掘る打製石斧にしても、鳥獣を倒す矢や槍の先につける石鏃や石槍にしても、木の実をすりつぶす石皿やすり石にしても、そして道具をつくる道具に至るまで、あらゆる道具が硬い石材で作られていた、いわゆる「石器時代」であります。硬い石材がなければ、いかなる生産も生活もできなかったはずです。

実際に発掘してみると、硬い石材がないはずの千葉県下のあらゆる縄文遺跡から、必ず各種の石器や石材がかなり多数出土します。当然ながら、それらの石はどこかから運ばれたものに違いありません。そこで、加曽利貝塚博物館では、千葉市内出土の石器・石材の原産地を鑑定する研究を、10数年にわたって埼玉大学

の新井重三教授に委託してきたのであります。その結果、新井先生の特別講演にもあるとおり、関東山地、秩父・榛名・箱根山地、長野県和田峠、新潟県糸魚川・姫川などから、それぞれ各種の石器や石材が運ばれていたことが判明したわけがあります。その詳しい内容については、本書所収の「遠くから運ばれた縄文時代の石」の項を参照してください。この研究の重要性が十分にご理解いただけると思います。

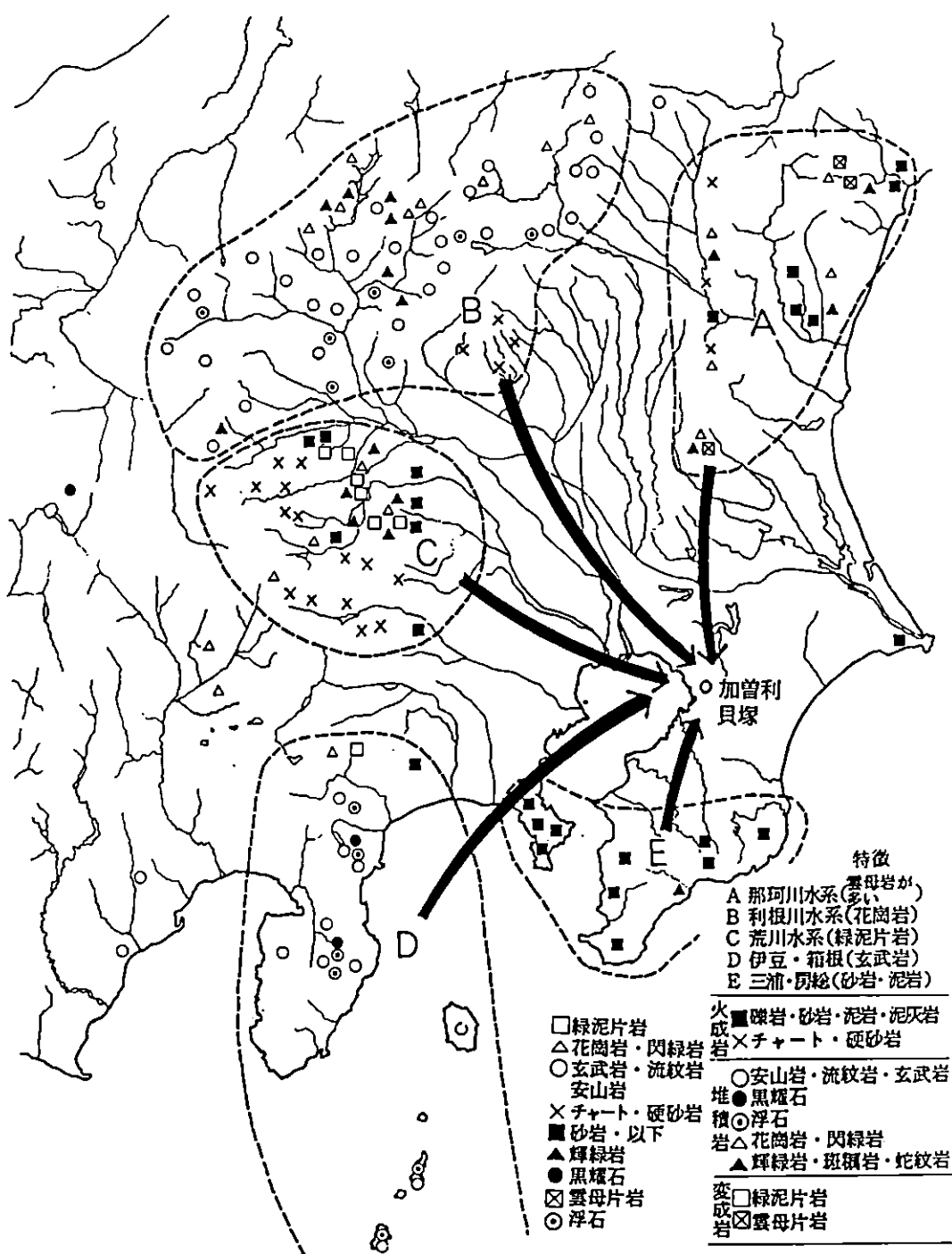
ところが、はたしてそれらの石器や石材を、東京湾沿岸の縄文人が各集落ごとに、それぞれ自給自足のために各地の原産地まで出掛けて行って、採集してきたものでありましょうか。生産用や生活用のさまざまな道具ごとに、その道具の機能に適した石材を用いており、しかも同じ磨製石斧でも、輝緑岩・閃緑岩・安山岩・頁岩などさまざまな地域のいろいろな石材を用いているのです（第7図）。

しかし、群馬県や栃木県など、石材の豊富な地域の縄文遺跡からは、ほとんどの道具にその地域原産の石材が用いられているという当然の現象がみられます。これと対比してみても、東京湾沿岸では、いかに各地の各種の石材に依存していたかがわかります（註23）。それらは、どこかで集結されるか中継されるかしなければ、各集落が個別で各地を訪ね歩いて採集しうるものではありません。

これはむしろ、当時すでに各地の特産物を余剰生産することによって、それぞれの地域に欠落している物資や生産物と物々交換する「交易」が行われていたことを物語っているのであります。すなわち干貝とは、沿岸地方に乏しい石材や石器を獲得するためにこそ、海難の危険をおかしても必死になって共同生産を行った交易物資であり、それによって、この地域において安定した生活を維持していたものと思われます。すなわち、縄文人はすでに、山の幸と海の幸の交換によって、山間生活と海浜生活の相互補完を行っていたのであります。

(3) 土器づくりの実験

加曽利貝塚博物館で、昭和45年以来続けている縄文土器製作技術の実験的研究も、こうした問題を解明する一つの手段であります。従来縄文土器のような粗雑な素焼の土器などは、粘土さえあれば、いつでも、どこでも、誰にでも作れるも



第7図 加曾利貝塚出土の石器石材の原産地分布図

(埼玉大学・新井重三作成、1973)

のと想定され、だから縄文土器は各地の集落で自給自足で作られていたという前提のもとに、その文様や形態の特徴によって、「土器型式」なる概念を設定してきました。そして、この土器型式は、それを作ったムラの^{くま}癖を表わすものであるから、土器型式を細分していけば、結局、それを作ったムラが捉えられると、真剣に論じられたこともあります（註24）。

しかし、この論考には、もともと何らの根拠も実体ありません。ただ、机の上で頭のなかで構成された仮説にすぎないのですが、考古学界ではこれが定説となって流行していたのです。そこで私は、まず土器製作に伴う諸条件や技術の実態を捉え、土器の文様や形態の実質的な意義を実感するためにこそ、加曽利貝塚博物館において、土器製作技術の実験的研究をはじめたのであります。その結果、意外な事実を発見し、縄文土器に対する認識を根本的に改めざるをえなくなりました。

たとえば、縄文土器の表面的な形だけを真似るのなら、たしかに誰にでもできるでしょうが、従来誰が作っても、中に水を入れると必ずしみ出てしまうので、おそらく何か澱粉質のものを煮ているうちに、糊状のものが気孔を塞いで、やがて漏れなくなるだろうと推断し、それで納得したままになっていました。しかし、実際に煮沸実験を行ってみると、水が漏れるような土器では、いくら周りから熱を加えても、中の水温は60℃以上には決して昇らないのです。それは、外側にしみ出る水が蒸発するための気化熱に奪われるため、温度が内側にまで達しないからであります。すなわち、水が漏れるような土器では、いつまでもものは煮えず、結局使いものにはならないのであります。

改めて縄文土器の内側を克明に観察してみると、縄文人は外面の文様や装飾などよりはるかに念を入れ、内面の器壁を徹底的につぶしているのです。この内面の「つぶし」にはタイミングがあり、まだ生乾きの段階でなければ効果はありません。しかしそれは、土器が内側に向って収縮しつつある不安定な状態のとき、外側に向って力を入れて押しつぶすのは、土器が割れたり亀裂を生じたりする原因ともなるもっとも危険な作業なのです。そのような矛盾した作業をあえて行っ

ているのは、それが水漏れを防ぐためには不可欠な条件であったことは明らかであります。

この「つぶし」の実験を行ってみると、その効果をあげるには、実は粘土や混和材の選定というもっとも基本的な問題からやり直さなければなりませんでした。そのために約10年を費やしたのです。その結果、水の漏れない土器が作れる粘土とは、きわめて限定され、どこにでもあるというわけではない。結局、その最適の粘土が豊富な地域には、縄文土器が密集して出土する遺跡が集中しており、その粘土の乏しい地域には、土器の出土量の少ない遺跡ばかりという現象ともびったり符合することがわかりました。すなわち、縄文土器も各集落で自給自足で作られていたのではなかったのであります（註25）。

(4) 分業と流通

たとえば、同じ加曽利貝塚から出土する土器の胎土を分析してみると、そのなかに、この房総の地では決して産出しない雲母や石英などの鉱物が混入しているものがあります。土器製作のとき、粘土の膨潤性や収縮率を小さくするため必ず混和材を入れるのですが、それらのものが、ただ混和材のためにわざわざ遠隔地から取寄せられたとは到底考えられません。

とくに雲母などは、それ自体の膨潤性が粘土よりも高いので、混和材としては不適当で、わざわざ混入するよりも、むしろ避けるべきものであります。それは、花崗岩地帯の粘土など、その地域では粘土自体に最初から雲母が入っており、雲母の入らない粘土が求めがたいので仕方なく用いた可能性が強いのです。すなわち、雲母混入の土器は、雲母産出地域で作られたもので、その土器自体が加曽利貝塚に運ばれてきたとみるべきでありましょう。

もちろん、雲母入りの土器ばかりでなく、加曽利貝塚からは各地で作られたと思われるいろんな土器型式の土器が同時に出土しており、これこそ加曽利貝塚で作られたと思われる土器などはほとんど見当りません。たとえば、この加曽利貝塚ではじめて発見され、そのために「加曽利E式」および「加曽利B式」と名づけられている土器さえ、他の遺跡から出土するものより貧弱であり、その出土量

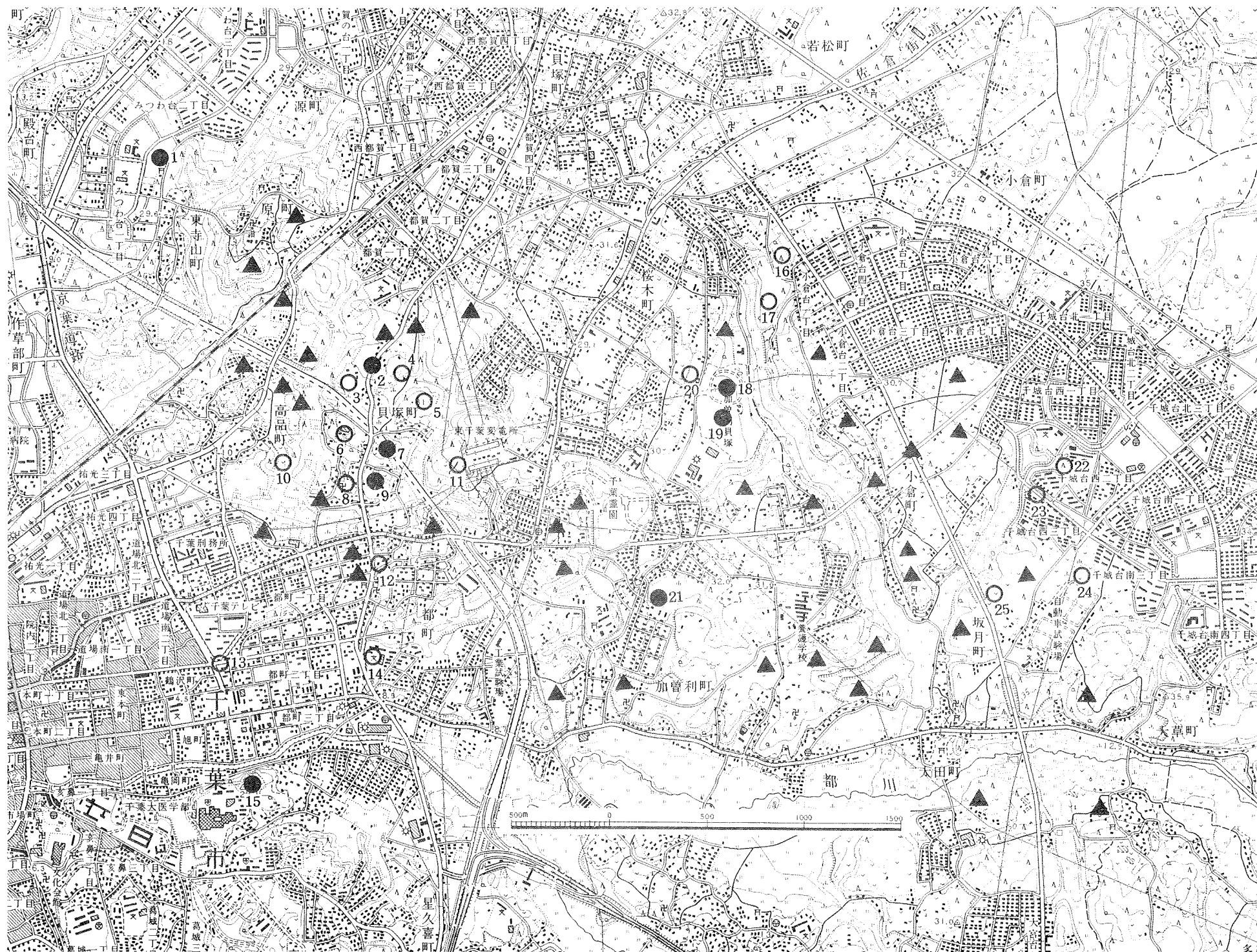
着させ、それを維持するためにこそ、大型貝塚を残すような共同作業が必要だったのであり、それが成立しなくなったら、たちまち、集落全体がこの地域から姿を消さざるをえなかったことを物語っております。

では、東京湾沿岸に集結していた縄文集落は、その後どうなったのでしょうか。これを探るためには、より広い視野をもって、関東地方の周辺、とくに中部地方や東北地方における集落遺跡の増減の様相と対比してみなければなりません。そのおおよその概観を述べると、縄文人は晩期になると、東京湾沿岸から大挙して、関東北部の山間地域や東北地方の大型河川の上流域地方などに分散していったと思われる。それらの地域では、縄文晩期になるとにわかに集落が増大する傾向があります。これは当然、人口の流動があったことを示しているものであります。

このように、縄文時代の社会とは、各個の集落が個別に自給自足の生産を行いながら、独自に存続していた閉鎖的な社会ではなく、かなり高度で広範囲な社会組織をもって有機的に関連していた共同的な社会であったことが十分に予測されるわけです。ですから、その相互補完の共同関係が成立しなくなると、縄文人たちは、新たな資源や生産を求め、その開発のための共同組織をもって移動し、その地域に新たな生活と文化を築いていったのであります。

(3) 加曽利貝塚と貝塚町貝塚群

以上のとおり、大型貝塚を伴う遺跡の存在によってこそ、東京湾沿岸における縄文時代の集落間の共同組織が確立していたことが予測されるわけですが、結論としてここに、その特殊遺跡の性格をいちおうまとめておかねばなりません。そこで、さきに大型貝塚を伴う遺跡とそれ以外の一般集落との関係を、その遺跡数の時期的変遷によって示しましたが（第1表）、各地域における平面的な分布状態を確かめるため、ここで加曽利貝塚と貝塚町貝塚群とその周辺集落の分布状態を例にあげておきます（第8図）。



第8図 加曾利貝塚及び貝塚町貝塚群周辺の縄文遺跡の分布 (1985・後藤和民作図)

- 大型貝塚を伴う遺跡 ○小型貝塚を伴う集落 ▲貝塚を伴わない集落
- 1 東寺山貝塚 2 草刈場貝塚 3 草刈場南貝塚 4 貝塚後貝塚 5 東辺田貝塚 6 荒屋敷西貝塚 7 荒屋敷貝塚
 - 8 西光院貝塚 9 台門貝塚 10 堤貝塚 11 姥ヶ作貝塚 12 木戸場貝塚 13 宝導寺台貝塚 14 向の台貝塚 15 矢作貝塚
 - 16 広ヶ作貝塚 17 滑橋貝塚 18 加曾利北貝塚 19 加曾利南貝塚 20 加曾利西貝塚 21 花輪貝塚 22 蔵立貝塚
 - 23 さら坊貝塚 24 味噌草野東貝塚 25 坂月台貝塚

第8図に示したとうり、坂月川の本・支谷を中心とするその流域地帯には、直径約2.5 kmの範囲に少なくとも27ヶ所の縄文遺跡が分布している。その本谷の奥に加曾利貝塚が占地し、それを要として、その他の一般集落が半径約2 kmの範囲に扇形に展開しています。とくに縄文中期においては、その外周部の本谷や支谷の最奥部や河口部に小型貝塚を伴う集落が分布し、加曾利北貝塚とそれらの集落との中間部には、貝塚を伴わない集落が展開している。縄文後期においては、加曾利南貝塚を中心に、貝塚を伴わない集落が本谷の周辺に散開するという傾向を示しております。

また、加曾利貝塚から直線距離にしてわずか西方2 kmの位置には、「貝塚町貝塚群」があります。これは、高品支谷と荒屋敷支谷とに挟まれた幅約500m、長さ約1 kmの長大な舌状台地上に、それぞれ所属時期を異にする大型貝塚が3ヶ所も集合しており、それを中心として、内側には小型貝塚を伴う集落が直径1 kmの範囲に8ヶ所、その外側には貝塚を伴わない集落が直径2 kmの範囲に14ヶ所、合計25ヶ所の一般集落が取囲んでいます。

このように、大型貝塚を伴う遺跡とそれ以外の一般集落とは、同一の本谷や支谷を中心にして、前期末から後期末にかけて常に共存しています。これは、同一の本谷や支谷を共有していたことを示しており、しかも、その奥部や中心的な位置に大型貝塚を伴う遺跡が存在していることは、ただ単なる偶然ではなく、むしろ相互に密接な関係があったことを物語っているのであります。

(4) 集落結集の場

このような現象からみても、大型貝塚を伴う遺跡は各地区において、その他の一般集落群の中心的な位置にあったことは明らかであります。しかも、一般集落は土器型式で2～3型式程度で常に移動しているのに対して、大型貝塚を伴う遺跡だけは、長期にわたって存続しつつ、常に一般集落の中心的位置を保っています。これは、一般集落の移動・展開の要が大型貝塚を伴う遺跡にあったことを表明しております。

そこで、先に触れたとうり、大型貝塚を伴う遺跡には、一般集落にはほとんど

伴出しない埋葬遺構や特殊住居などの特殊遺構や、装身具や土偶や石棒などの特殊遺物が、多種多様にしかも多数が集中しているという現象を想起していただきたい。これらの遺構・遺物は、それぞれ祭祀的な行事や儀礼に伴い特殊な機能をもったものです。それらが、特定の場所に集中しているということは、その特殊機能がそこに集約されていたことを表明しているのであります。

ですから、もともと大型貝塚を伴う遺跡とは、ただ単に干貝の共同生産の場や、その干貝によって交換した石材や石器を分配する共同交易の場ばかりではない。それと同時に、そのような一般集落の共同性を確保し維持してゆくためには、その結合紐帯として、血縁や精神的な結びつきが必要であったはずであり、その共同祭祀の場でもあったのであります。すなわち、この特殊遺跡は、一般集落とは本質的に異なった特殊機能の場であって、ある特定の地域において連帯する集落群の、いわば「結集の場」として、共同生産や共同交易とともに共同祭祀を行うところであり、まさに地域共同体の核的な存在であったとみるべきであります。

このように、従来、縄文時代における一般集落の典型であるかのごとく、「馬蹄形集落」として捉えられてきた大型貝塚を伴う遺跡は、むしろ一般集落とは厳然と区別すべき特殊機能の場であります。そして、従来馬蹄形貝塚の中央広場をもって、一つの集落における構成員の結集の場と考えられてきましたが、実は、この特殊遺跡全体が周辺集落の共同生産・共同交易・共同祭祀の場として、地域共同体の核的存在であったのであります。

お わ り に

「貝塚」という一つの歴史現象も、縄文時代の社会や文化の全体のなかでしか捉えられないものであります。といっても、一時代の社会や文化というものを的確に捉えることは至難の業だといわねばなりません。冒頭に例としてあげた巨人伝説や矮人伝説のように、それを解釈し叙述するわれわれの観点の如何によって、その対象を過大評価したり過小評価してしまうからであります。

この私の縄文時代の把握や貝塚の解釈は、従来の定説に比べるならば、あるい

は巨人伝説のように思われるかも知れません。しかし、いくら客観的にみても、従来の定説こそ矮人伝説的であるというべきで、私自身は、将来の研究によっては、私の仮説さえ矮人伝説となる日が到来するほど、縄文時代とは、もっともっと高度で意義深い時代であったと予測しております。

とくに、開発造成に伴う緊急発掘調査のおびたしい今日、明確な観点や問題意識をもって調査に当たっている研究者があまりに乏しいのです。ただ既成概念によって、機械的に遺構や遺物を掘り出す「記録保存調査」が流行しております。従来のような矮人伝説的な狭い観点で掘れば、それなりの事実しか捉えられないのは当然です。そんな偏狭な観点によって考古学的事実をいかに数多く記録し保存したところで、そこから生まれる解釈は所詮矮人伝説にすぎません。このままだと、いつまでたっても考古学の進展もなければ、縄文時代の社会や文化を的確に捉えることもできません。貴重な遺跡ばかりが消滅し、将来の研究の可能性を失うばかりであります。

だからこそ、いまや、いい加減な観点で遺跡を破壊するよりも、明確な観点を確立するまで遺跡を保存しなければならないのです。私が、20数年間、加曽利貝塚の保存に努力してきたのも、この遺跡の深遠なる意義や価値は、現在のいかなる優秀な考古学者といえども測り知れるものではない。だからこそ、将来それをこつこつと究明してゆくためにも、その可能性をできる限り大きく確保しておかねばならないと思うからで、それ以外の何ものでもありません。

もうわれわれには、ただ「ああでもない」、「こうでもない」と、他説の批判論のみに終始している暇はないのです。一日も早く、従来の偏狭な先入観から脱却して、みづからより広大でよりの確な観点を確立することによって、少しでも妥当な歴史に書きかえるよう努力しなければならない時期にきています。

そのとき、私がここに提示した観点や解釈が、もし何らかの踏み台となり役に立つならば、望外の歓びとするところであります。

＜脚註＞

- (1) 「常陸国風土記」『風土記』日本古典文学大系2 岩波書店(1958)
- (2) 佐久間義和『奥羽観蹟聞老誌』享保4年 清野謙次『日本考古学・人類学史』所収
- (3) 鳥居龍蔵「コロボックルに就て坪井・小金井両博士の意見を讀む」『太陽』第9巻第13号(1913)
- (4) スウィフト作 平井正穂訳『ガリヴァー旅行記』岩波書店(1980)
- (5) L・H・モルガン著 青山道夫訳『古代社会』岩波書店(1958)
- (6) エンゲルス著 戸原四郎訳『家族・私有財産・国家の起源』岩波書店(1966)
- (7) Childe, V. Gordon, "Social Evolution" London, (1951)
- (8) デーウィン著 八杉竜一訳『種の起源』岩波書店(1963)
- (9) 庄司 克「千葉市都町宝導寺台貝塚発掘調査概報」『貝塚博物館紀要』第3号 千葉市加曾利貝塚博物館(1970)

なお、この種の遺跡については、宝導寺貝塚のほかに市川市根古屋貝塚などが知られているが、最近千葉市においても、浜野川河口部に神門貝塚が発見され、現在発掘調査中である。ここでは、縄文前期の黒浜・諾磯期の貝層が中心になっているが、その一角に、小規模な集石遺構を伴っている点が注目される。しかし、装身具や土偶などの特殊遺物の伴出は認められていない。

- (10) 八木槌三郎『日本考古学』博文館(1906)
- (11) 浜田耕作『通論考古学』大鐙閣(1922)
- (12) Steenstrup; "Kjökkenmøddinger" Denmark (1869)
- (13) E・S・モース『大森介塚古物篇』東京帝国大学理学部(1879)
E・S・モース著 石川欣一訳『日本その日その日』創元社、(1939)
- (14) 江見忠功「貝塚に就て」『人類学雑誌』第30巻第2号(1915)
- (15) 清野謙次『日本原人の研究』岡書院(1925)
- (16) 和島誠一「原始聚落の構成」『日本歴史講座』1(1948)
- (17) 和島誠一・岡本勇「南堀貝塚と原始集落」『横浜市史』第1巻(1958)
- (18) 麻生 優「縄文時代後期の集落」『考古学研究』第7巻第2号(1960)
- (19) 岡本 勇「加曾利貝塚の意義」『考古学研究』第10巻第1号(1964)
- (20) 芹沢長介『石器時代の日本』築地書館(1960)

坪井清足「縄文文化論」『岩波講座日本歴史』第1巻 岩波書店(1959)

(21) 漁師の話によると、イカのスルメでもサンマのヒラキでも、海水からあげたまま天日に干すと、海水中のバクテリアと太陽の輻射熱のために、たちまち腐ってしまうので、こうした干物を作るには、真水でよく洗ったり、いったん熱湯でふかしたりしなければならない。こ

れは漁村における長い間の常識であるという。

- 020 新井司郎編『縄文土器の技術』千葉市加曽利貝塚博物館（1973）
- 金子浩昌編『貝塚出土動物遺存体の研究』千葉市加曽利貝塚博物館（1982）
- 新井重三編『縄文時代の石器』千葉市加曽利貝塚博物館（1983）
- 020 新井重三「磨製石斧の石材と原産地」『利根川の自然と文化』関東地区博物館協会（1983）
- 040 杉原荘介『原史学序論』葦牙書房（1943）
- 050 後藤和民『縄文土器をつくる』中央公論社（1980）